



殺生譚の変貌(一)

—中世説話から近世説話へ—

石 黒 吉次郎

一

筆者は室町時代の演劇・物語の素性をより明らかにする観点から、近年近世文学に関心を抱くようになった。近世には膨大な文学作品が書かれており、それらと室町期文学との比較は容易ではない。したがって当面は近世の初期の文芸として著名な仮名草子に焦点を当てることにした。しかし一方では「近世説話」という概念も形成されている。

これには奇談雜筆や勸化本と称するものが含まれ、中世説話の伝統を引くものである。天和四年（一六八四）序文の『古今犬著聞集』や延享元年（一七四四刊）の『続沙石集』などは、題からして中世説話の継承をうかがわせている。

近世説話という述語が現れたのは、堤邦彦氏によれば一九七〇年代のことと、研究資料日本文学第三卷『説話文学』（明治書院、昭和五十九年）、『説話文学の世界』（世界思想社、昭和六十二年）あたりから、近世の説話が扱われ始めたという。中世の仏教説話の系譜を引くこれらのものは、氏によれば近世怪異小説の素材源となっており、^{〔注〕}そのような小説化が中世説話の近世的変貌の大きな特色であるということができよう。このような流れの中から、ここではいかにも仏教の時代にふさわしい中世の殺生譚が、近世においてどのように変貌するかについて、いささかの考察を試みる。もとより不殺生戒は仏教の生命思想と深く結びついており、また日本においては有史以来、為政者

から殺生禁断の令が発せられ、これによって国家的災厄を逃れようとしたという政治的、文化的な側面もあり、問題
はたいへん大きく複雑である。この論ではできるだけ説話にテーマを絞って意見を述べるつもりである。

さて中世以前の説話集において殺生譚は数多くあるが、今この考察を進めるために、『増補改定説話文学索引』（清
文堂、昭和四十九年）殺生の項等を参照し、そのテーマを整理すると、主として以下のようなパターンがあるであ
う。

- 一 殺生を機縁とする発心・往生型
- 二 殺生による不幸型
- 三 殺生による墮地獄型
- 四 殺生による墮地獄・蘇生型
- 五 殺生を自らとどめる中止型
- 六 殺生をとどめさせる禁止型
- 七 殺生を戒め生類を放つ儀式を述べる放生会型
- 八 殺生を特別に許す許容型

一の発心・往生型は『大日本国法華経験記』卷中・七十六話、『今昔物語集』卷十三・三十七話に見える、仁和寺
近くの香隆寺の僧が鳥獣魚類を殺しては食していたが、つねに法華経を誦していたために、臨終に際して正念を得て
往生したという話、『大日本国法華経験記』卷下・九十七話、『今昔物語集』卷十五・四十六話に見える、長門の殺生
を事とする阿武の大夫が臨終の後に法華経によって蘇生し、出家して兜率天に往生した話（一部蘇生型となる²）、『日
本霊異記』卷下・二十五話、『今昔物語集』卷十二・十四話に見える、藤原馬養とその祖父麻呂が海で釈迦に助けら

れ、以後殺生をとどめて出家した話、『今昔物語集』卷十九・十四話、『宝物集』卷七等に見える、殺生を事とする源大夫が発心して往生する話、『新修往生伝』に見える殺生を事とした源伝が人知れず念仏を唱えて往生する話、『発心集』卷五・十五話に見える、鷹を飼っていた男が、その餌のために大の腹を切った時、子が生まれ、母犬はそれをくわえて逃げようとして死んだのを見て発心したという話、『撰集抄』卷七・十二話に見える、俊方という武士が鹿と思つて地蔵を射て出家した話、『大日本国法華経験記』卷下・百二話、『今昔物語集』卷十五・四十三話等に見える、丹波の中将雅通が殺生をしていたが、読経によつて往生した話、『続本朝往生伝』・『発心集』卷三・三話等に見える、源頼義が殺生を事としていたが、のちに造仏・造寺等を行い往生した話、『大日本国法華経験記』卷下・九十四話、『今昔物語集』卷十五・三十話等に見える、美濃の殺生を事としていた僧葉延が往生した話、『大日本国法華経験記』卷下・百十二話、『今昔物語集』卷十四・十話に見える、陸奥の壬生の良門が日頃人に危害を加え、畜生を殺していたが、聖人に会つて発心し、法華経書写などを行い、兜率天に往生した話、『大日本国法華経験記』卷下・百十三話、『古本説話集』卷下・六十四話等に見える、奥州の鷹を取る者が崖の鷹の巢に向かつて海に落ちそうになり、海中の毒蛇に助けられ、以後出家した話、『大日本国法華経験記』卷中・七十六、『今昔物語集』卷十三・三十七話に見える、香隆寺の住僧が鳥獸や魚の殺生を行っていたが、法華経の読誦によつて往生する話、『沙石集』卷七・十四話に見える、下野に住む者がつねに鷹を使い、その餌として雄の鴛を殺したが、雌の鴛が夢に現れてこれを恨んだために出家した話などがあつてもつとも多く、法華経の功德によつて救済されることが多いのが特徴的である。源雅通は法華経の中でも提婆品に深く心を留めていたという。殺生をしても仏道によつて往生できるといふ趣旨によつて、殺生をもつぱらとする人々を入信させようとしたものであらう。殺生譚においてもつとも重要なテーマであつたと思われる。法華経は幅広く人々を救済する仏典であつた。『大日本国法華経験記』卷中・七十三話、『今昔物語集』卷十五・

二十八話等に見える、鎮西の淨藏法師が牛馬を殺していたが、法華經を信仰し、不淨を恥じてなお仏道に精進し、極樂往生を願ったというのも、この型の変型である。この種の説話はあまり異国にはないようで、日本的な話かと思われる。殺生を止めて出家するようにという唱導がよく行われていたのであろう。ただし『私聚百因縁集』巻五・十六話には、震旦の殺獲鹿という者が、山里で狩をするうちに古寺で阿弥陀仏を一礼した。死して黒繩地獄に堕ちたが、一礼した阿弥陀仏によつて蘇生し、出家人道した話を載せている。このように一の型は数多い。

二の不幸型は『拾遺往生伝』巻中・二十六話に見える、下道重武が殺生を事としたために、悪瘡に悩まされて死去した話、『日本靈異記』巻上・十六話、『今昔物語集』巻二十・二十八話に見える、大和国の人が兎を捕らえ、皮を剥いで放ったところ、ほどなく毒の瘡が身に生じて死去した話、『沙石集』巻七・十二話に見える、下総に住む鷹飼が重病となり、股の肉を雉が食らうように思われた。そして股のあたりが刀で切り取られたようになったという話がある。鷹を飼うには動物の肉が餌として必要となるので、鷹飼はことに罪深いと見られたようである。悪瘡が体に生じるなどの異変が起こるのは、日頃の動物を殺す罪によるものと考えられたのであろう。しかし鷹飼の罪の話は中国の説話にもある。『今昔』の巻九に、遂安公が鷹を飼い、餌として殺した五匹の犬に悩まされて病氣となった話（二十二話）、隋の時代姜略という鷹楊郎将が鷹狩によつて殺した鳥類に悩まされ、以後殺生を止めたという話（二十五話）。さらに震旦の李の寛が鷹を飼い、その餌のために殺生をし、そのために鷹のくちばしのような子を儲けた話（二十六話）が記されている。そうした震旦の説話の影響がこうした話にはあるのであろう。これらは『冥報記』巻下や『法苑珠林』等に見えるものである。『今昔』巻九にはほかに、隋の時代代州に王という將軍がいた。狩を好んで殺生したために、娘が変死してしまった。このために永く殺生をとどめたという話（二十一話）や、潘巢というものが道端にいた羊の舌を抜いたところ、自分の舌も消失した。羊のために善根を積んで、一年後に舌が生じたという

話(二十三話)、冀州の子が、つねに隣家の鶏卵を盗んでは焼いて食していたところ、自分も膝より下は焼かれて失ってしまうという話(二十四話)を載せている。鳥類の卵を食するのも罪深いとされており、この考えは能の『善知鳥』にも引き継がれてゆく。また『沙石集』巻七・十三話では、尾張で鶏の子を殺して子に食わせた女が、子に死なれた話を載せる。『今昔』の巻二十七・二十二話は、獵師の母が老いばれて、鬼となってわが子を食おうとした説話であるが、これも獵師の殺生の罪も意識した話と思われる。

三の墮地獄型は二の不幸型をさらに徹底したものである。『今昔物語集』巻九・二十七話は、周の武帝が鶏卵を食して冥途に至り、大きな苦を受けたというもので、『冥報記』巻下や『法苑殊林』等に見える。日本では『十訓抄』第五・一話に見える、死去した河原の左大臣こと源融が宇多法皇の宮人に、在世中の殺生により、苦報を受けていることを告げた話がある。具体的にどのような殺生をしたかは記されていない。『発心集』巻三・三話には、伊予入道こと源頼義は罪を感じて出家し、無事往生したが、その子息は善知識もなく、懺悔の心もなく、無間地獄へ堕ちたとしている。この息とは義家のことであろうか。頼義に較べその息が仏道に赴かなかったことが、僧の恨みを買っているように見える。

四の墮地獄・蘇生型は三の墮地獄型を発展させ、後半を救済型に変えているものである。これも中国の説話に先例があり、この種の型は中国で発達したものと考えられる。『今昔物語集』巻六・十一話は、幽州の虞安良が殺生を事とし、死して地獄に堕ちたが、兄の釈迦仏造像を助けた功德により、蘇生したというもの、同・三十五話は、孫宣徳という官人が死して閻魔の庁に至り、その殺生を責められたが、華嚴經書写の願いを抱いていたことによって許され、蘇生したというもの、同・四十一話は温州の張居道が鳥獸を殺していたが、病死して惡道に堕ちようとしたが、金光明經の書写を約束して蘇生したというもので、これらは『三宝感應要略録』に見える。巻九・二十八話は遂州の

捻官孔恪が死して冥途に赴き、牛を殺し、鵜の卵を食した罪を問われたが、修善と懺悔のため七日間蘇生したというもの、同・二十九話は殷安仁が馬を殺した罪により、冥府に赴かんとし、それは他人の仕業であることを説いて免れたというものである。これらもやはり『冥報記』巻下・『法苑珠林』等に見える。日本では『日本霊異記』巻中・五話に、摂津の国に住む富裕な者が、漢神に崇られ、七年間に牛七頭を殺して祭った。死して閻魔の庁に赴いた。しかるに生前放生を行っていたため、許されて蘇生したとある。結びに最勝王経の一万匹の魚を放ったという流水長者の話を載せているにで、この者も魚を放ったのであろう。『沙石集』巻二・六話では、駿河の富士川で殺生をなりわいとしていた男が死して地獄に堕ちたが、地藏を信仰していたために蘇生したという。この男は富士川で魚を取って生活していたのであろう。『私聚百因縁集』巻九・四話には、近江の日吉神社の神領の民であった松依は、神領を捨てて水海（琵琶湖か）のほとりに住んで、魚を取って生活した。その後五十三歳で死去し、閻魔の庁に赴いた。しかるに日吉神社（本地阿弥陀如来）に一度詣でた功德により蘇生し、のちに念仏して往生を遂げたとある。日本においては鷹飼などの狩猟よりも漁労の殺生が重視されてきたようであり、それは日本的な殺生観の一つなのではないかと思われる。これは漁業が盛んであった我が国の事情によるものでもあろう。四の型の変型としては、『沙石集』巻一・八話に漢土の話として、牛羊魚鳥などをもつて祭られていた古い釜の神が、禪師によって打ち砕かれた。神は業苦を離れて天に生まれ変わったと伝える。

『梁塵秘抄』には、「鵜飼はいとほしや 万劫年経る亀殺し また鵜の首を結び 現世はかくてもありぬべし 後生わが身をいかにせん」(三五五)という歌謡がある。殺生をする鵜飼の後生を憂いたものであるが、ここでは鵜飼が鮎などを取ることを罪として歌ってはいない。歌謡でめでたいものとしてよく歌われる亀(『梁塵秘抄』では三三六から三三一の歌謡)を、鵜の餌として殺すことに衝撃をうけて歌っているものである。今様を歌う者らしい発想が

あるといえる。また鵜を虐待していることも彼等には罪に見えるものであった。『法然上人行状絵図』には、卷二十二に、

一、魚・鳥くひて、いかけて経はよみ候べきか。

答、いかけてよむ本体にて候。せでよむは、功德と罪とともに候。但、いかけても、よまぬよりはよむはよく候^③。

とあるが、魚鳥を食した場合、沃懸^{いかけ}（水を注ぐこと）をしてから経を読むのが本来である。しないで読経するのは功德にもなるが罪ともなる。ただし沃懸しないでも、読経しないよりする方が良いとしている。法然は殺生を現実的なこととして、認めていたのであろう。法然の浄土教には摂闍家の九条兼実などの公家や熊谷直実などの武家が信者となったが、旧仏教からの非難も激しく、老齢に至って土佐配流に処せられた。『法然上人行状絵図』卷三十四によると、播磨国高砂の浦で、「いろいろづの命をたちて、世をわたるはかりごと」としていた海人の老父婦が入信したという。漁民には漁労を殺生の罪とする意識もあつたということであらう。

五の中止型は次の禁止型、放生会型の話とともに、『三宝絵』によく見えるものである。編者の源為憲は仏道の功德として、殺生の禁止、放生に関心を寄せていたのであろう。卷上・九話には、鹿の王が国王の鹿狩りに対し、孕んでいる母鹿と胎内の子鹿のために、我が身を身代わりにしようとしたため、王はついに殺生をやめたとある。この話は六度集経卷三を中核とし、大智度論卷十六、大唐西域記卷七をも参照して構想したものだとい^④う。『三宝絵』卷上・十三話は、天竺の施无という長者の孝子を国王が鹿と誤って射殺してしまった。しかるに施无は帝釈の加護によつて蘇生し、王は永く殺生をとめたという話で、仏説菩薩睺子経や六度集経卷五によるとい^⑤う。震旦の話としては、『今昔物語集』卷十・二十八話の、かの国の国王がある時江に行つて多くの魚を釣るうちに、大魚が現れてこれ

を嘆いたので、王は釣りをやめて宮殿にもどったと言う話がある。前述の『今昔』巻九・二十一話はこの範疇にも属するであろう。『日本靈異記』巻上・十一話、『三宝絵』巻中・六話には、播磨の漁夫が身を焼かれる苦しみを受け、法華経を講じていた元興寺の僧慈応の加持で死を免れ、漁を止めたと見える。『続古事談』巻四・十七話は、道昌僧都が天皇に、帝王の殺生と凡夫の殺生とはどちらの罪が重いかを聞かれ、魚鳥を多く食する帝王の方が罪は重いと答え、「凡夫は山海の禁制あれば、かり・すなごりたやすからず。わずかに是をとりて心腹をやしなふ」と言ったというものである。狩猟民や漁民にはそれなりの禁制があつたらしく、それを遵守するとわずかしが取れなかったという。この禁制は宗教的あるいは共同体的なルールであつたのであろう。そのルールを破る話が能「鵜飼」である。

六の禁止型では、『三宝絵』巻中・一話、『今昔物語集』巻十一・一話、『聖徳太子伝暦』巻上の、聖徳太子が六歳の時、百濟から渡つた経論を見、六斎を定めてこの日の殺生を禁じた話、『拾遺往生伝』巻中・十三話の、右大臣藤原良相が聖教を学び、真言に精通し、鷹鵜漁獵を一切禁じたという話がある。後者の禁止令は『類聚三代格』貞観元年（八五九）八月十三日官符等に見えるが、当時日本における殺生としては、鷹飼、鵜飼が代表的なものであつたことが知られる。殺生禁断令は朝廷や幕府の政策として、古くから行われてきた。『続日本紀』には養老六年（七二二）七月に祈雨のために大赦等が行われ、屠殺等が禁じられたこと、天平九年（七三七）八月に月の六斎日には殺生禁断を行うべきこと、天平宝字二年（七五八）七月に皇太后不例のために殺生禁断を行い、猪鹿の類を獲るべからずの令が出たことなどの記事が見える。後世では白河院が晩年深く仏教に帰依し、しきりに殺生禁断を行ったことは有名で、『今鏡』巻二・『古今著聞集』巻八・『古事談』巻一に見える。『吾妻鏡』には鎌倉幕府において、鶴岡八幡宮の放生会や毎月の六斎日、春秋の彼岸に際し、殺生禁断を行ったことが見える。さらに下つて『看聞日記』応永二十七年（一二二〇）三月条に故足利義満將軍の十三回忌法要のために殺生を禁じ、これを獵師に命じたとある。天武朝以

来盛んに行われた殺生禁断については、古くは林恒徳氏の説話から考察した論があり、平雅行氏による殺生禁断の思想はケガレを忌避する神祇信仰との関わりをより重視すべきであること、殺生禁断の区域を設けることは、王権と関わるものであることなどを述べた論がある。⁷⁾こうした政治的な殺生禁断令と説話との関係では、次の許容型に述べる白河院時代、貧しい僧が魚を老母に与え許された話が関わる。

七の放生会型では、『三宝絵』巻下・二十六話に豊前の宇佐八幡宮での放生会起源を述べる。養老四年(七二〇)に大隈、日向で反乱が起こり、これを鎮圧した際に多くの兵人を殺害した。そのために毎年放生会を行うようになったとする。これは怨霊鎮撫の意味があつたかと思われるが、『今昔物語集』巻十二・十話ではこれを受けて、八幡が石清水に垂迹した後、金光明最勝王經巻九に見える流水長者の放生の功德に倣って、放生会を始めたという。

八の許容型では、『私聚百因縁集』巻六・四話に、釈迦の弟子新学比丘が母のために魚を取ったが、釈迦はその孝養を哀れみ、咎めなかつたとある。これと似た話は『十訓抄』第六・十九話、『古今著聞集』巻八・十一話等に見える。白河院の時代殺生禁断が行われたので、魚鳥が出回らなくなつた。ある貧しい僧が老母を養うために、自ら桂川で小さい魚を取った。これを見咎められたが、院はその孝養に感心して許したという。この頃は肉といえば魚肉と鳥肉が主なものであつたことが知られる。『発心集』巻八・十三話には、ある上人が琵琶湖で鯉を買い取り、湖に放つたが、夢に鯉が翁の姿となつて現れ、賀茂の供祭となつて往生しようと思つたのに邪魔をされたと怨んだという。また『沙石集』巻一・八話には、安芸の厳島明神は多くの魚類が神前に備えられることに対し、殺生の罪は我にあつて、魚を取る者は罪が軽い。魚類は供え物になることによって、仏道に入る方便ができるのだと託宣を下したとある。これは先の流水長者が魚のために法を説き、多くの魚は死して三十三天に生まれたとする話(『三宝絵』巻上・七話)の流れにあるものであろう。魚類は神に供せられることによって、救済されるものであつた。これは神仏習合

による極めて日本的な放生思想ということができようであろう。『とはずがたり』巻四にも、伊勢の小朝熊神社は天照大神の姿を写した鏡を祭っていたが、神は「我、苦界の鱗いさなを救はんと思ふ願あり」と、岩の上に現れたという。水辺の神々はこうして時には魚類を救う仏教的な存在になるのであった。こうして放生思想は日本においては、魚類を対象に発達しており、それは魚類に対する殺生観と表裏をなすものである。網野善彦氏は漁民、海民が歴史の中で果たしてきた役割は大きく、彼等の中には供御人、神人となっている者も多いとしている。⁽⁸⁾ 漁民は時に神聖な存在であったことになる。『今昔物語集』巻十二・二十七話には病氣にかかった聖人が魚を求めると、これが法華經に変じた。ある。僧は病氣に際して薬用に魚肉を用いることがあり、それは法華經によって救われることで、その行為を正当化するための説話と思われる。

狩猟についての例では『とはずがたり』巻五に、二条が備後の国の豪族の屋敷に逗留すると、そこで鷹狩が行われ、多くの鳥や猪が殺され集められたことが見える。それを二条は「おほかた悪業深重なるふし(ママ)」と評しており、出家した彼女にとっては、地方の大掛かりな狩りをたいへん罪深いものと思ったようである。都人らしい感覚が働いているといえるであろう。なお『神道集』巻四・信濃国鎮守諏方大明神秋山祭事、巻十・諏訪縁起事には、諏訪大明神が殺生をする者と殺される畜類のために自分はこの世に出現したと述べ、神前に供えられた鹿、鳥、魚などをみな成仏させていたとあり、神仏習合的な諏訪明神が殺生罪業の問題を解決する神であるとされる。⁽⁹⁾ 諏訪明神の場合、魚類を守るだけでなく、獸類、鳥類をも守る神で、中世にはこうした生き物を守護する仏教的神々が各地に存在していた。これは神前に獸類等を供え物とすることに對する神社側の言い分けであり、またこのために獸類等を殺した人々を救うことでもあった。ここには古来の日本の神觀念と仏教の放生思想との衝突の回避があるのであろう。

以上、殺生譚をタイプにそつて概観したが、そこには日本人の殺生観の特色のほか、食生活などがうかがわれて興

味深いことが種々見えるのである。

二

こうした仏教的な殺生譚を受けて、中世以降にもさまざまな説話が見える。まず謡曲にそれを求めると、現行曲に「阿漕」「鵜飼」「善知鳥」「放生川」「合甫」がある。また室町時代に作られた番外曲では、「網持」がある。⁽¹⁰⁾ これらを先にあげた殺生譚のタイプに従うと次のようになる。「阿漕」は阿漕が浦に住む漁夫が、伊勢神宮にはばかって殺生禁断となっている所で網を使って密漁をし、罰として沖に沈められ、地獄に墮ちた話で、墮地獄型に属する。神域近くの海に禁漁区が設けられたらしいことは「藍染川」にも見え、宰府の神主が住む近くの藍染川も網を使用してはならない殺生禁断の所であつたとある。神社近くの魚鳥は神の所有するところなので、人間が取ってはならないということであろう。「鵜飼」は甲斐の石和川のうち、上下三里間は殺生禁断のところであつた。その付近に鵜飼は多かつたが、ある鵜飼がこの禁を侵し、鵜を使い、これが見つかつたため、川底に伏し漬けにされ、地獄に墮ちたといふもので、これは閻魔王によって、法華經の功德のもとに救済されるようである。撰津猿楽の榎並の左衛門五郎の作といふ(『申楽談儀』)。先の墮地獄・蘇生型と似るが、墮地獄・救済型の話といえるであろう。「善知鳥」は越中の立山に現れた男の亡霊は、実は陸奥の外の浜の漁師で、鳥を捕らえて生計を立てていた。この殺生のために地獄に墮ち、自分が捕らえた鳥は地獄で怪鳥となつて彼を苛むのであつた。立山は日本海側一帯の亡霊が集まる山であつた。山上の荒々しい風景は、立山地獄と呼ばれるにふさわしいものである。この能も墮地獄型に属するものといえる。「網持」は摂津の渡辺に住む漁師の娘が、父の殺生を悲しんで入水する。それを知つた父は出家するといふもので、「漁翁発心」とも称する。これは発心型に属する。「放生川」は放生会型の能で、世阿弥の作である。鹿島神宮の神職が京都に上り、石清水八幡宮に参詣し、魚を川に放つ老人実は武内の神から八幡神の縁起を聞くといふもので、石清水の放

生会の由来をテーマとしたもので、世阿弥らしい神能となっている。足利將軍との関係から、石清水は彼にとつて重要な神社であった。「合甫（合甫の玉）」もまた放生会型の能である。中国の合甫の浦に住む者が、漁師から珍魚を買い取ってこれを放すと、童子が現れ、放生の礼を述べる。のちに鮫人が現れ、二世にわたる願いを叶えることを約束するもので、「放生川」が縁起譚の性格を持つのに対し、こちらは動物報恩譚の性格を持っている。なお後に取り上げる『法華経鷲林拾葉鈔』巻十二・珠才覺事では、合甫は天竺にあり、珠の在所であるとしている。

これらを見ると、能にあつては、ほとんど漁業に関わる殺生がテーマとなっている。当時の日本においては魚類が動物性蛋白の中心にあつたことによるものであろう。漁師が殺生において罪深いとされていることは、『梁塵秘抄』などに見える考えを継承するものである。これに対し、狩人の殺生については能においてはあまりテーマとならない。番外曲に「鴛鴦」という曲があり、これは近江の阿曾沼に住む狩人が鴛の雌鳥をしとめた。するとその夜の夢にその鴛が現れ、供養を頼むので、翌日供養を行うと、鴛の霊が現れるというもので、鳥類成仏の趣を持つ。狩人は殺生の罪の意識はあるものの、それを責められるわけではない。この話は『法華経直談鈔』巻十末二十一話等にも見えるが、これでは下野の阿曹沼のこととする。能にあつて狩は「鵠」や「殺生石」などのように、妖怪退治に結びつくもので、罪悪視しにくかったのかもしれない。また狩人が山の神に近い存在であると考えられていたこと、武家階級が鷹狩りなどを好んでいたこと等によることも考えられる。『徒然草』六十六段には、岡本関白こと藤原家平に仕え、雉などを捕っていた御鷹飼下毛野武勝の話が見える。漁師を罪深いと考えることは、より庶民的な感覚によるものであろう。ただし「善知鳥」の主人公は漁師と狩人の中間的な存在であるようである。殺生の結果として、主人公が地獄に墮ちる墮地獄型が多く、しかも地方性に富んでいることや、殺生禁断の地における密漁などが能における殺生物の特色である。地方において禁忌の区域があつたことは、『藍染川』のほか、番外曲の「堀兼（堀兼の井）」にも

見える。解脱上人が武蔵の国霞関で関清次夫婦の霊に会う。彼等は地神に禁じられていた井戸を掘ったために、狂乱してついに地獄に堕ちたのであった。二人は上人に回向を頼むというもので、これも禁忌侵犯による墮地獄型である。この堀兼の井は埼玉県川越市にあり、和歌に詠まれ、『とはずがたり』巻四にも二条が訪れたと見える名所であった。地方にはこのような禁忌を犯したために、ある時はリンチ的に罰せられ、怨霊となって祟ったという伝承があったのであろう。名所にまつわる伝説である。それを救済するのは各宗派の僧達であり、さらに鎮魂するのは能の役割であった。「阿漕」で漁師の霊に会うのは、日向の国の者であるが、「鵜飼」の場合は安房の清澄から出た僧で、日蓮宗の僧であろうと思われる。甲斐国行脚を志しているが、その主要な目的は身延山詣であっただろう。「善知鳥」においては諸国一見の僧で、素性は明確ではない。「網持」では、漁夫を出家入道させたのは、里の僧であった。また「堀兼」で夫婦の霊に回向を頼まれたのは解脱上人こと貞慶であった。したがってこれは鎌倉時代の話となる。阿漕が浦において、神域に近いために年に一度だけ網が許されることは、『源平盛衰記』巻八・讃岐院事に見えることが指摘されている。¹¹「鵜飼」の仏教的な面については、伊藤博之氏が指摘している。それによれば、鎌倉時代中頃、律宗の中興の祖叡尊は殺生禁断の地を各地に設ける運動を推し進めた。鎌倉で律宗を広めた忍性は、そのため日蓮と衝突した。「鵜飼」における石和川をめぐる殺生禁断の話は、律宗の活動と日蓮の布教にまつわる時代的な背景があるとある。それとともに、この能には禁制を重んじる共同体意識が強く反映している。これらのうち、近世との関係で言えば、「阿漕」は古浄瑠璃の「あこぎの平次」に受け継がれ、寛保元年(一七四一)浄瑠璃「勢州阿漕浦」が成立した。阿漕浦の平次は母の病気に効くという戴帽魚を得るために、海に網を入れ、宝剣を手に入れる。その罪が露見すると、家来筋の者が身替わりとなるというもので、孝行譚と結びついた殺生譚となっている。孝行と結びついた殺生も、先の許容型に見られるものであった。説話伝承の伝統が復活する例である。「善知鳥」も後に見るように、

近世の仏教説話の中で継承されていた。また宝暦十二年（一七六二）成立の浄瑠璃「奥州安達原」に趣向として用いられた。安倍氏の忠臣善知鳥安方が文治と名を変え、真任の子千代童の薬のために、禁制の鶴を殺すことになるというものである。殺生はある目的を持った意志的なものとなり、仏教的な支配からは逃れようとするものである。謡曲は中世の殺生譚を知る上では、もっともよい材料であると思われる。能の場合は地方性が特徴的で、これはその土地土地の信仰や伝説と深く関わるのであろうが、詳細はいまひとつ不明である。殺生譚は鎌倉時代にことに地方において新たな展開があったことが想像される。そこには狩猟民・漁業民の救済と鎌倉の宗教との問題があったのである。

三

能においてはこのように能独自の殺生観が見えて興味深く、それは時代の現実とも関わったためであるらしいが、室町時代の説話集においては、どのような記載が見えるのであろうか。一条兼良の著かという『楊鳴曉筆』は説話集と随筆の二つの性格を持った雑録とされるが、その巻二十三・雑「殺鳥狩人」の話では、仏の説法の前に、十ばかりの鳥を殺して手に持った狩人が現れた。仏が沈黙したため、狩人は去った。仏は、狩人は昔国王で、嫁女達に殺された。あの鳥はその嫁女達であり、狩人は成仏するであらう、と説いたという『旧雜比喩經』巻下の話を記す。¹³これは純粋な殺生譚ではなく、仏典に依拠した伝統的なもので、数は少なく新しい殺生観の展開は乏しい。

この傾向は仏教書においても顕著であるようである。まず鎌倉時代最末期の成立とされる『説経才学抄』の巻五下「不殺生戒」に、大智度論からの引用を交えて、殺生の罪を一般的に述べるだけである。天台宗または日蓮宗と関わりとされる『因縁抄』でも五十話「殺生二重々有ル事」で、一般論として多くの殺生は重罪に当たるものであること

を述べる。七十四話「漁師ノ事」では、唐の獵師が獸類を殺して生活していた。二匹の鹿を追ううちに、二匹は鬼神となつて獵師を責め、迷ううちにある理想的な内裏に宿つた。次の日見ると、木の枝に書物が挟んである枝に自分もいた。この書は法華經の卷三であつたという。これは獵師が仏法と結縁したことを述べているもので、発心・往生型の一步手前の形である。室町時代末期とされる『因縁抄・六難九易』の「殺生事」でも、殺生戒を犯せば地獄に墮ちるとするだけである。これは十七世紀後半成立かとされる『因縁集』にも受け継がれる。「殺生ノ報」として挙げられている説話は三話で、いずれも中国の話である。一話は河澤という広州の役人が、つねに鵝、鴨、鶏などを好んで食していたが、一人子が鵝を煮る釜に落ちて焼け死んでしまったというもので、『報恩録』に見えると注記がある。

殺生による不幸型に属する。二話は唐の則天武后の時代、京兆の李全聞という富裕の者が殺生を好み、獸類、鳥類、魚類を殺しては食していたりした。ところがその妻は奇怪な子を産み、死んでしまった。次の年もまた次の年もこれが続き、家は滅んでしまったというもので、『広古今五行記』に見えるとある。これも不幸型に属する。三話は北齊の張思和という獄吏が犯罪者を苦しめ、生羅刹と称せられた。その妻は男女四人を産んだが、いずれも難産で、奇怪な子を産み、まもなく死んでしまった。彼はのちに非法ゆえに罰せられ、子もなく、一門は途絶えてしまったというもので、『太平広記』に見えるとある。これも不幸型に属するものである。これらは殺生の話は、古代・中世とは異なつた漢籍に典故を求められており、それが新しい殺生譚の展開といえるであろう。また殺生の結果、奇怪な子を産むというストーリーは、因果応報的で、近世好みのモチーフといえる。こうした話が近世の怪談的な文学に影響を与えていることは想像できる。

さて法華經は殺生の罪を贖う經典であつたが、その直談の抄では殺生譚はどのように現れるであろうか。鎌倉時代の法華經の注釈である『花文集』（澄憲著）、『法華經勸進抄』には特に殺生に関する言説はない¹⁴。下つて戦国時代成

立の『法華經鷲林拾葉鈔』では、卷二の薄伽羅の事に、彼は百六十歳を保ったが、これは前世に不殺生戒を保ったからだとしている。そのほかにこれといった殺生譚はない。また同時代の『法華經直談鈔』の卷二末・十三話には、地藏十輪經に見えるとして、王の病氣を治すために金の獅子が必要となり、旃陀羅という獵師が引き受けた。彼は僧衣を着れば獅子に食われないと聞き、これを着て獅子に近づくと、これが偈を説いて導いたため、悪心を翻して出家し、提婆となったとある。さらに卷十末・二十一話では、下野の阿曹沼で、獵師が一番の鴛鴦をとめると、雌の鳥が夫を返すように言ってきた、一首の歌を詠んだ。これにより獵師は発心し、高野山に上り往生したという発心・往生型となっている。この話は前述のように『沙石集』卷七・十四話にあり、『法華經鷲林拾葉鈔』嚴王品、『法華經直談鈔』同にも見える。『古今著聞集』卷二十では陸奥の国赤沼のこととする。東国で流布した説話であろうが、古くからあり、特に新味のあるものではない。能の「鴛鴦」と同話である。このように本書における殺生譚は乏しいが、中世末期における法華經の注釈書においては、一般的に殺生譚については低調であったといえる。

直談系統の説話を集録した『直談因縁集』においては、卷三・九話には唐の宝在大士が日夜殺生をしていたが、病氣に罹って発心し、法華經を信じて往生したという発心・往生型が見える。廣田哲通他編『日光天海藏 直談因縁集』（和泉書院、平成一〇年）の類話一覧によると、この話の出典・類話は見えない。同卷・一二話は、奥州の夫婦が善光寺に詣でると、常州の信田の莊に住む海士のコウタウという者を尋ねよという夢想を得た。夫婦が帰りに信田に立て寄ってこれを探ね、この由を伝えた。そしてそこに居して一心不乱に念仏を唱えると、海士も同じく念仏を唱え、ついに極楽往生をしたというこれも発心・往生型である。常陸の信田といえ、幸若舞曲の「信田」の舞台で、この地が天台僧などの宗教家が活動していたことを思わせる。法華經の注釈書『一乗拾玉抄』は明応二年（一四八八）常陸国信太庄若栗郷北宿の坊にいた傳海が書写している。また奥州の夫婦が善光寺で夢告を得て、信田に赴くの

は能「善知鳥」の構想にも似ており、能の構成のひとつに説経の話の影響があることが具体的に知られる。漁師の殺生譚であることは、日本的な特色であった。これも特に類話はない。同二十話は唐土の盗人が殺生をやめて出家した。しかし盗みはやまず、地獄に堕ちた。弟の聖が哀れんで過去帳に載せると、ついに成仏したというもので、出家・墮地獄・往生と複雑な型を取る。これも類話はない。巻五・八話は源是満という者が鵜や鷹をもてあそび、出家し往生するもので、『法華驗記』一〇二話に見えんとする。同巻・二十九話は、破戒の僧が魚を食そうとし、弟子がこれをいさめたというもので、『沙石集』巻三・五話に見える。同巻・三十四話はある者が僧の形で金色の獅子の皮を剥ぎ、王に捧げて地獄に堕ちたが、地藏菩薩が現れ、仮にも出家したからとこれを蘇生させたというもので、出家・墮地獄・蘇生型とこれも複雑な形となる。これは『三宝絵』巻上・八話、『宝物集』巻四等に類話がある。巻七・二十九話は天竺において阿弥陀仏が釣人の殺生を止めるために、大魚に変じて食され、改心させて往生させるというもので、殺生中止・往生型となる。『三宝感應要略録』巻上・十八話、『今昔物語集』巻四・三十七話等に類話がある。巻八・十八話は、『今昔物語集』巻十九・二十九話や『宝物集』巻五等に見える山陰中納言の話で、放生会・報恩型となる。いずれにしても中世後期らしい殺生譚の新たな展開は見られないといつてよいであろう。唯一巻三・十二話がこの時代を思わせて興味深い。ただ先に分類した殺生譚の型を複合したような構想が好まれたらしいことがわかる。直談系の編者は従来の古典籍に見える話に大きな関心を示し、世間の噂話にはあまり注意を払わなかったように見えるのである。

すなわち中世の末期に至るほど殺生譚は重んじられなくなる傾向にある。そしてこのあたりに上代以来の仏教的、伝統的な殺生譚の終焉があり、戦国時代が終わり、近世を迎えるに及んで、新しい形の殺生話の始発があるのではないかと思われる。これは殺戮が日常的であった時代相にもよるであろう。戦国の世は日本人の殺生観をかなり転換せ

しめたことを想像させる。一方『神道集』に見える狩獵を認める諏訪の神への信仰は、山中で仕留めた獣類に引導を渡す言葉とする「諏訪の神文」の形で各地へ流布していった。¹⁵ ここには貴族社会とは異なつて、庶民階級からより積極的に殺生を認める思想が現れているということもできるであろう。そしてこの種の説話は、近世の殺生観にもつながるものを持つように思われる。笹田教彰氏は肉食の思想の上で、御伽草子「ささやき竹」において、恋する娘を迎え取ることになった僧正が、馳走に山海の珍味を弟子達に調えさせる。若い弟子達はもともと放逸無慚の者共で、色々の魚鳥を取り出し準備したというプロットを注目されている。¹⁶ これも室町時代の殺生観の一端をしめすものであらう。これとは別に『徒然草』百六十二段の、承仕法師が多くの雁を殺して、禁獄されたという話も興味深い。いずれにせよ日本における殺生観はなかなか複雑であった。

注

- (1) 『近世仏教説話の研究』（翰林書房、平成八年）序章
- (2) 『今昔物語集』の兜率天往生については、児玉里麻氏の論文がある（『今昔物語集』における転生譚―切利天と兜率天を中心に― 松本寧至編『中世文学の諸問題』新典社、平成十二年）
- (3) 『法然上人絵伝』（岩波文庫）による。
- (4) 新日本古典文学大系『三宝絵・注好選』（岩波書店）三十五頁脚注
- (5) 同右六十三頁
- (6) 聖徳太子の殺生禁断説話については、松本真輔「『聖徳太子伝暦』の殺生を避ける太子像」（『古典遺産』五三号、平成十五年）がある。

- (7) 林「殺生放生説話の成立と展開」『国語と国文学』(昭和四十七年二月号)、平「殺生禁断の歴史的展開」(『日本社会の史的構造』思文閣出版、平成九年)がある。
- (8) 『中世再考』講談社学術文庫、平成十二年、一九頁
- (9) これについては河田光夫「殺生・肉食を善とする説話の成立」(『説話文学研究』第二十一号、昭和六十一年六月)において、殺生・肉食を悪とするのは、獵漁民等を悪人とする差別観念があったことを述べる。また橋本章彦「『神道集』における神々の活動と天台性悪法門―いわゆる殺生祭神の問題とのかかわりから」(石橋義秀他編『仏教文学とその周辺』和泉書院、平成十年)において、この説話が天台性悪法門との関係で論じられている。このほか殺生戒と肉食の関係、『神道集』に見える諏訪明神の性格については、従来論が多い。
- (10) 竹本幹夫・橋本朝生編「能・狂言必携」(学燈社、平成七年)の「能作品全覧」による。
- (11) 新潮日本古典集成『謡曲集・上』(新潮社、昭和五十八年)「阿漕」の解題。
- (12) 「鵜飼」『日本文学』昭和四十九年十一月号。なお平雅行「殺生禁断と殺生罪業観」(脇田晴子他編『周縁文化と身分制』思文閣出版、平成十七年)でも、鎌倉時代の律僧によって殺生禁断の思想が極北に至ったことを論じる。
- (13) 市古貞次校注『榻鳴暁筆』(中世の文学、三弥井書店、平成四年)五一六頁頭注
- (14) 真福寺善本叢刊2『法華經古注釈集』(臨川書店)所収
- (15) 中野真麻理「諏訪の神文」(『一乗拾玉抄の研究』臨川書店、平成十年)
- (16) 「殺生禁断と肉食」佛教大学「文学部論集」八十六号、平成十四年三月

この論文は、「近世における中世的説話集の研究」というテーマで、平成十六年度に専修大学より助成を受けた研究の成果の一部である。